

言語と理念性

——メルロ＝ポンティ『フッサール「幾何学の起源」講義』における
ハイデガー言語論の導入をめぐる——¹

澤田哲生

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』以来ハイデガーの思想に大きな関心を持っていた。この関心は1959年から60年に行われた『フッサール「幾何学の起源」講義ノート』（以下『講義』）にとりわけ垣間見ることができる。このなかで、フッサールが提唱する「言語共同体」という概念を論じる際に、ハイデガーの『言葉への途上』が補助線として導入されている。

フッサールが提示する「幾何学の起源」は、幾何学という形式が一つの意味を形成（「意味形成」、Hua. III, S. 367）し、万人に認識可能な形式となる歴史的なプロセスの探求である。つまり「幾何学の起源」への問いは「幾何学の意味の起源」（Hua. III, S. 365）への問いを意味するのである。意味が歴史において普遍的な形式となる過程を描く上で、フッサールは二つの条件を提示する。1. 理念の客観化と2. 言語使用者による共同体である。1. 幾何学が普遍的な形式となるには、幾何学を発明した者（ピタゴラス、ユークリッド、等々）が持つ「理念」が「誰に対しても」（Hua. III, p. 367）認識可能な形式となる必要がある。フッサールはこの客観化の働きを「理念的な客観性」（Hua. III, S. 369）と呼ぶ。2. 客観性を獲得した理念は、次に、世代から世代へと伝承されることで歴史的な普遍性を獲得しなければならない。「世代の連鎖」（Hua. III, S. 367）が意味形成の必要条件となるわけである。この連鎖は、思想ないし観念の連鎖ではなく、言語を前提とする。フッサールはこの連鎖を「言語共同体」（*ibid.*）と呼ぶ。

「発話において現出するのが意味作用にとって本質的なことです」（Notes 1959, p. 39）と『講義ノート』におけるメルロ＝ポンティはフッサールの考え方に合意している。ところが言語の機能に関して、彼はフッサールと決定的に異なる見解を示す。「理念性は言語上の理解に対して一次的でも二次的でもなく、理念性は言語のなかで生じるが、[...]言語を支配することもない[...]のです」（Notes 1959, p. 27）。メルロ＝ポンティは言語と理念性が概念上で同等の価値を備えていることを主張する。さらに「言語は実在の世界に意味を下ろし、その意味を理念的な世界に同時に設えるのです」（Notes 1959, p. 40）と著者は説明する。理念性が客観化され言語上で交流可能な形式となるというフッサールの見解に反して、メルロ＝ポンティは、まず「言語」が理念性の歴史上での展開において指導的な役割を担うと主張している。つまり理念性が客観化されるこ

¹ 主に言及されるテキストの略号は下記の通り。引用に際して略号と原文のページ数を表示する。既存の翻訳は可能な限り参照したが基本的には論者が訳出した。訳者各人のご理解を請いたい。Notes 1959: Maurice Merleau-Ponty, *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl*, Paris, PUF, coll. « EPIMETHEE », 1998; Hua. III: Edmund Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und transzendente Phänomenologie* (1936), Husserliana, Bd. VI, Haag, Martinus Nijhoff, 1962; Martin Heidegger, *Unterwegs zur Sprache* (1959), Gesamtausgabe Bd. 12, Frankfurt am Main, Vittorio Klostermann Verlag, 1985.

とで言語的な交流が始まるのではなく、最初に言語が表現として「作動する」(ibid.) 事態をメルロ=ポンティは重要視しているのである。

言語の重要性をさらに提示するために、『講義』におけるメルロ=ポンティは『幾何学の起源』の読解を中断しハイデガーの『言葉への途上』を導入する(Notes 1959, pp. 47-50)。メルロ=ポンティは『言葉への途上』所収の「言葉」と題された論文に言及している。この論文において、ハイデガーは本来的な形で表現された発話は、理念や観念等々の何物にも根拠を持たず、自ずから表現する事態を提示している。つまり「言葉が語る」(GA12, S. 11 / Notes 1959, p. 48)のである。このハイデガーの有名なテーゼを『講義』におけるメルロ=ポンティは重要視する。言語は理念が実現されるための手段ではない。つまり「言語はある意味において第一次的であり、基礎づけられておらず、基礎を欠いており *abgrund*、開け、高みへの転落なのです」(Notes 1959, pp. 49-50)とメルロ=ポンティは説明する。言語表現は特定の理念に基礎づけられた表現手段ではなく、歴史の内部で独自に展開する。この言語機能はもちろん統語論や意味論のような文法機能に拠るのでもない。「同じく、言語は基礎づけられるのを止めたのです。理念性の支えとなったのです。では基礎づけるものになったのでしょうか。そうではありません」(Notes 1959, p. 65)。自らの背後に一切の根拠(基礎づけるもの/基礎づけられるもの)を持たない言語行為が、理念性の歴史的な展開に重要な役割を果たすとメルロ=ポンティは主張しているのである。「幾何学の起源」の講義を再開した後もメルロ=ポンティは、フッサールが提示する表現された諸語の「沈殿」(Notes 1959, p. 69)という概念を重要視しつつ、講義を進行する。ハイデガーの言語論は、メルロ=ポンティが『幾何学の起源』における言語論を論じる上で重要な役割を担っていたことが理解される。